

I：まぶたが下がる 眼瞼下垂の巻

「目は口ほどに、ものを言う」と言いますが、目の状態ほど表情や体調を的確に現しているところはありません。わずか1mmでもまぶたが下がると眠たく見えるし、まつ毛が当たっていると泣いているように見えます。

また、充血やめばちこの腫れなどは、「目が病気である」ということを人に発信するバロメーターとなります。人間も動物ですから、本能的に相手の状態を見極めるのに、目の情報を最大限利用しているわけです。相手が笑っている、怒っている、元気である、病気であるという情報は特に大事です。

世の中の女性は、アイラインやまつ毛を盛ったりして、気の毒なほどお化粧品をして出かけていますが、診察台で拡大してみると、目自体はそれほど大きく変わらないことに気づきます。つけまつげは虫みたいで気持ち悪いですけど。しかし、パッとみた一瞬の目からは、化粧品をするのとしらないのでは、数倍違います。

これは、人間の頭の中で、目に対する認識の領域がすごく大きく出来上がっていて、とても鋭敏に反応するようになっているからです。

たとえば、舌は味覚を感じるのにとっても鋭敏ですが、口の中に何か入っていたと思って、取り出してみると、1～2mmくらいの大きさの異物であることがわかります。

これが、目になると、0.1mmの大きさのものでもコロコロすると言って、来院されるのですから、目の触覚に対する鋭敏さも優れているのがわかります。このように目という器官は、正常と異常の区別がととても鋭敏な器官なのです。

現在の日本は、とても速いスピードで進化した高齢化社会です。また空前の健康ブームだと思えます。特に若さや健康な肉体に対する意識がとても高まっています。

この間の、リオデジャネイロ オリンピックでも、選手のグラビア本が本屋さんに山積みになっていたり、TVでもイケメンよりも肉体美を誇る芸能人が多用されたりで、健康という部分に目が当たっている時代だと思えます。

なので、老人であっても「何歳に見えるでしょう？」みたいな、昔で言うところの「色気ボケ」しているような人たちが、若く見えることで脚光を浴びるような時代になってきています。

現に私の患者さんでも80歳を越えていても、60歳くらいにしか見えない人はたくさんいますし、逆に昔のお年寄り「梅干しばあさん」みたいな人は、かなり少数派になりました。それがいいとか悪いとかは言いませんが、時代＝ブームのようなものがあって、「ジーンズブーム」とか「フォークブーム」とかもありましたが、それと同じような「健康ブーム」だと思えます。しばらくは、この現象は続くでしょう。

前置きが長くなりましたが、現在はそういう環境であるという認識のもとで話を進めていきます。

まぶたが下がっている状態には、主に二つがあります。

どちらも加齢でおこるのですが、

①眼瞼下垂：まぶたを挙げる筋肉が緩んで、もしくは筋肉の付着部が、まぶたの固い板である瞼板から外れることで筋肉の力が上手く伝わらなくなって、眼が開けられなくなる病気です。ハードコンタクトレンズを長期に装用した人にも良くみられます。シルベスター・スタローンの目って、下がってますよね。眼瞼下垂はあのイメージです。

瞳孔縁にかかってくるたら、手術適応です。

②眼瞼皮膚弛緩：圧倒的にこちらが多いです。日本人は元来、一重まぶたの人が多い民族ですから、まぶたにストッパーがありません。二重の人は、そのスジ、ラインがストッパーになって、皮膚が垂れ下がってきても、そこで止まるのですが、一重のひとは、そのまま落ちてきて、内側の皮膚の余りの少ないところだけが、隙間が残り、三角目という状態になります。これも瞳孔縁にかかってくるたら、手術適応です。あまりにも皮膚あまりが強い場合、眉毛の下で皮膚をとることもあります。芸能人でいうと、田原総一郎さんが、以前、かなり垂れていたのですが、いまはかなりすっきりしているので、どこかで手術されたのだと思います。

①②の二つが合併していることもあります。手術の時には、状態をみて皮膚のみを切除するだけで良いのか、筋肉を動かさないといけないのか、確認します。

③それ以外に、先天下下垂の方、生まれつきの眼瞼下垂の方もおられます。吊り上げ術という手術が必要なのですが、少数派なので、今回はおいておきます。

②の手術では、皮膚を取るだけで良いのですが、注意点がいくつかあります。

1. 血が止まりにくい薬を飲んでいる方は、事前に中止してもらおうということ。
2. 男の方で、コワモテで通している方は、手術後にすこし可愛らしくなってしまうこと。
3. 手術前は、目を一生懸命あげようとして頑張っているのですが、眉毛がかなり上のほうに上がっているのですが、(もちろん、おでこに皺もよっています) 手術後は、しばらくすると、眉毛がだんだんと下がってきて、(本来の位置に) 結局、またまぶたが下がってくるということがあること。この場合には、半年ほど様子を見て、また追加の手術をすることもあります。

①の眼瞼下垂の手術について、もう少し詳しくお話ししましょう。

眼瞼挙筋は、二重構造になっています。裏側がミュラー筋という筋肉で、不随意筋です。表側が眼瞼挙筋という筋肉で随意筋です。目をあけてくださいと言われて挙げることができるのは、この眼瞼挙筋が元気な証拠です。普段何気なく目を開けていられるのは、ミュラー筋のおかげと言われていています。ハードコンタクトレンズをしている人が、眼瞼下垂になりやすいのは、裏側からコンタクトがこするせいだとも、コンタクトを外すときに、目を上に引っ張りあげるからだとも言われています。

私は、手術をするときに、皮膚側から切開してまずは眼輪筋、その下の眼窩脂肪、眼瞼挙筋腱膜、ミュラー筋と順番に確認していきます。手術中に、その方の眼瞼の解剖と構造を見て、腱膜を前転する手術か、ミュラー筋を縫縮する手術かを決めています。

また、挙げすぎると、まぶたが閉じなくなって、眼が乾燥して角膜障害を起こしてしまうこともあります。難しいのは、麻酔をしたときに、まぶたを開ける筋肉と、閉じる筋肉に効く強さが違うので、手術中に、これだ！という高さに挙げておいても、手術の翌日にはやや形が変わっているということがあります。このあたりは、長年の経験と勘で対応するしかないのです。

あとは、左右差ですが、人間の目は左右で形が違うので、同じように手術をしても、人形さんの目のようにはいきません。このあたりは、分かっていたきたいところです。

また、手術してから2週間程度は、術後パンダと呼ばれている、(皮下出血で目の周りが真っ赤に染まる)状態になること、リンパ浮腫と言って、まぶたが腫れることをご了承ください。

いろいろと怖いことばかり言ってきましたが、手術をしないとしないでは、みかけがすっかり変わりますし、若返ります。またまぶたの上にかぶさっていた邪魔な皮膚が取れるので、帽子を脱いだ時のように、かなりすっきりすると思います。最近では、眼瞼下垂の手術をしたら肩こりがとれるという話を聞くと思います。まぶたが重いために、おでこの筋肉(前頭筋)を使って、眉毛を挙げているために、頭の筋肉を使い、また首を挙げて物を見ているために首の筋肉が異常に張っているからなのですが、それが取れるからという理屈があります。

このように、良いこともたくさんあります。手術適応かどうか、当院で判断いたしますので、気になっている方は、是非一度診察にお越しいただければと考えています。